

今月の主なニュース

AICSとは？
当協会がん予防医療部長・三浦 猛
「私と協会」
前神奈川県医師会会長 大久保 吉修氏
登校刺激とは何か
―保護者・担任・養護教諭の関わり―
さくら教育研究所所長・小澤 美代子氏
当協会が「かながわME-BYO
見える化センター」に認定
第11回がん克服シンポジウム
「もつと知ろう！乳がんのこと」

4面 3面 2面



公益財団法人 神奈川県予防医学協会

寄生虫検査60年の歩み

寄生虫予防が出发点

平成24年、学校保健安全法施行規則が一部改正され、寄生虫検査が、今年4月から必須項目から削除された。当協会の前身、神奈川県寄生虫予防協会章創期から続いている検査は「寄生虫検査」で、当協会の出発点でもある。草創期から検査に携わってきた当協会の森雄一専門委員による「寄生虫検査60年の歩み」を2回にわたって掲載したい。

当協会発行の機関紙・誌

昭和30年9月、協会創立半年目に早くも機関誌「寄生虫予防」第1号を発行した。その表紙は当然のごとく「寄生虫卵写真十六葉」であった(写真)。

横浜医科大学(現・横浜市立大学医学部)高木逸麿学長から「公衆衛生の改善」、慶応大学医学部松林



久吉教授の「回虫の話」、県衛生研究所児玉威所長からも「寄生虫病予防の根本対策」等が寄稿されている。そして最後の1頁には、昭和30年4月から7月までに実施した学校検査約11万件的検査結果を掲載している。この「寄生虫予防」誌は、昭和39年19号を最後に、予防医学協会発足と同時に「予防医学」誌として再編され今日に至っている。

の窓」を発行。また、検査・健診についても、単に実施数や検査・健診数だけの記載ではなく、追跡管理結果や、統計的解析・疫学的まとめ等についてその全貌をより詳細な記録として残すため「事業年報」を創刊した。今も継続発行している協会の定期刊行物3種である。

協会発足時の寄生虫検査

協会の「事業年報」の中央部オレンジ色のページは、「検診・検査の種目別実施数」の一覧である。その中ほどに協会創立時から今日に至るまでの年度の実施数が記載された項目がある。「寄生虫検査」である。神奈川県寄生虫予防協会として発足以来60年余、連綿として実施してきた記録でもある。

昭和30年は、敗戦から10年目。「最早戦後ではない」と声高に叫ぶ方もいたが、

寄生虫症等の感染症はまだまだ全盛の時代であった。横浜市内の中心部にはアメリカ軍を中心とする「かまぼこ型兵舎」が威圧するかのようには整然と並び、市内最大の繁華街・伊勢佐木町には米兵が闊歩し、焼け残った主要なビルはすべて進駐軍に占領されていた。そのような時、有志が集ってスタートを切ったのが「神奈川県寄生虫予防協会」であった。その頃の地域住民の寄生虫検査の感染状況を、「寄生虫予防」誌から抜粋してみた(表1)。

大野地区以外は、現在の横浜市内都築区・青葉区・港南区である。都築・青葉の両区は、今でこそ住宅地であるが当時はまだまだ農村地区であり、市営バスも一日に数本しか通らないところであった。

回虫卵は35〜55%、鉤虫卵は低い地区でも7%、高い地区では20%を超えていた。高濃度感染地区が、横

浜市内にも存在していたのである。人糞が肥料として多用されていた頃のことである。学校検査も、同様な結果を示していた。

代表的な寄生虫症

鉤虫(十二指腸虫)は、肥料として土壌に撒かれた糞便中の虫卵が外界で孵化、その幼虫が手足の皮膚から経皮的に感染する。侵入した幼虫は、小腸下部の十二指腸に定住し成虫となり腸管壁から吸血する。鉤虫が1匹感染していると1日の失血量は、猪口一杯分にもなる。1センチ程度の小さな鉤虫ではあるが、口から血液を吸いながら、お尻から排出するというポンプの働きをしているからである。吸血時に造血機能に影響を及ぼす毒素(鉤虫毒)を人体に注入、貧血をさらに増幅させる。大変恐れられていた寄生虫症である。

回虫は、外界で成熟した虫卵が野菜等に付着したり、埃とともに経口的にヒトに摂取され、腸管内で孵化する。その後、幼虫は血流に乗って人体内を一周して、再び小腸に戻ってきて成虫になる。この頃、数十匹も寄生していることは珍しくなかった。20〜30センチになった成虫は、ヒトから栄養を摂取するだけではなく、時には虫体が絡み合い腸閉塞を併発し、またある時には虫垂に潜り込み虫垂炎の発症原因にもなっていた。

昭和33年4月、学校保健法の施行以降、検査・駆虫の諸費用が自治体単位に予

算化され、寄生虫検査は全国的に普及拡大した。しかし、最近の寄生虫感染率は著しく減少したため学校保健法が改正され、平成28年度から廃止されることになった。

この間、私たちは全力で検査と駆虫に努めてきた。寄生虫撲滅のためには、集団単位に実行すると効果が期待できるという疫学的調査に基づく「集団検査・集団駆虫」を積極的に展開。陽性率の高かった昭和30年代初期「寄生虫予防10%運動」を提唱、県下隈なく推進した。その後の「回虫ゼロ作戦」や、農村地区における「鉤虫撲滅運動」等にも運動した。

昭和30年当時学校での虫卵保有率38.5%が、43年には1%以下に減少した。まさに「鉤虫落としの落日」のようであった。駆虫薬の開発・改良、化学肥料の普及、さらには、生活環境の改善等が、私たちの運動に拍車をかけた。便検査陽性率ゼロ%の学校も昭和41年頃から出現、50年には過半数を占めるまでになった。ぎょう虫検査は、昭和46年頃からゼロ%校が散見され、平成13年に至ってようやくその割合は50%を超えた。スピードの差こそあるが、寄生虫感染は確実に減っていった。

検査件数も、昭和38年の81万3千86件をピークに、48年までは漸減傾向、49年以降は急速に減少した。協会創立以来今日までの検査件数は、便検査が1千百万余件、ぎょう虫検査は約2千5百万件に及んでいる。いかに寄生虫撲滅に全力投球してきたかを窺うことができる(表2)。

草の根運動で虫卵保有は「鉤虫落としの落日」

以下、次号につづく。

表1 1955(昭和30)年度 住民・学校の寄生虫検査結果

	検査数	受検率	回虫	鞭虫	鉤虫	その他	陽性者
大野地区	5,668	46.9%	1,961 (34.6%)	268 (4.7%)	372 (6.6%)	62 (1.1%)	2,377 (42.0%)
山之内地区	3,263	72.7%	1,472 (45.1%)	189 (5.8%)	358 (11.0%)	50 (1.5%)	1,718 (52.7%)
中川地区	1,534	31.1%	849 (55.3%)	103 (6.7%)	211 (13.8%)	46 (3.0%)	946 (61.7%)
川和地区	171	39.0%	94 (55.0%)	11 (6.4%)	39 (22.8%)	0 (0.0%)	117 (68.4%)
都田地区	87	43.5%	50 (57.5%)	8 (9.2%)	10 (11.4%)	2 (2.3%)	57 (65.5%)
港南地区	345	5.2%	132 (38.3%)	20 (5.8%)	34 (9.9%)	13 (3.8%)	165 (47.8%)
全県下・学校検査	225,623	—	72,332 (32.1%)	20,299 (9.0%)	1,444 (0.6%)	4,163 (1.8%)	86,873 (38.5%)

表2 学校寄生虫卵検査の延実施数

便検査		ぎょう虫検査	
1955～1961	浮遊集卵法 3,085,911	1956～2014	セロファンテープ法 25,516,958
1962～2014	セロファン厚層塗抹法 8,649,975		
合計	11,735,886	合計	25,516,958